

マインドワンダリング傾向と注意機能の関連性

人間福祉学科 福祉心理系 佐原綾香

今現在遂行中の課題や行為から注意が逸れてしまうマインドワンダリング (mind wandering) という現象 (Smallwood et al., 2006) は、多くの場合、課題成績を低減させることが報告されている。しかし、高速逐次視覚提示 (rapid serial visual presentation: RSVP) 課題においては、マインドワンダリングをする傾向が高いと、注意の瞬き (attentional blink) が減少、すなわち課題成績が向上する場合があることが示されている (Thomson et al., 2015)。本研究では、RSVP 課題を用いて、人格特性としてのマインドワンダリング傾向と注意機能の関連性を検討した。その結果、マインドワンダリング傾向が低い人の方が注意の瞬きが少ないという、先行研究とは逆の結果が示された。マインドワンダリングは、自分の目標を維持して思考や行動を制御する実行機能との負の関係性が指摘されており、今回の実験では、実行機能の失敗という側面が強く表れたものと考えられる。したがって、マインドワンダリングは課題などの外部に注意を向けるときの個人の認知機能特性の違いを表している可能性が示唆された。